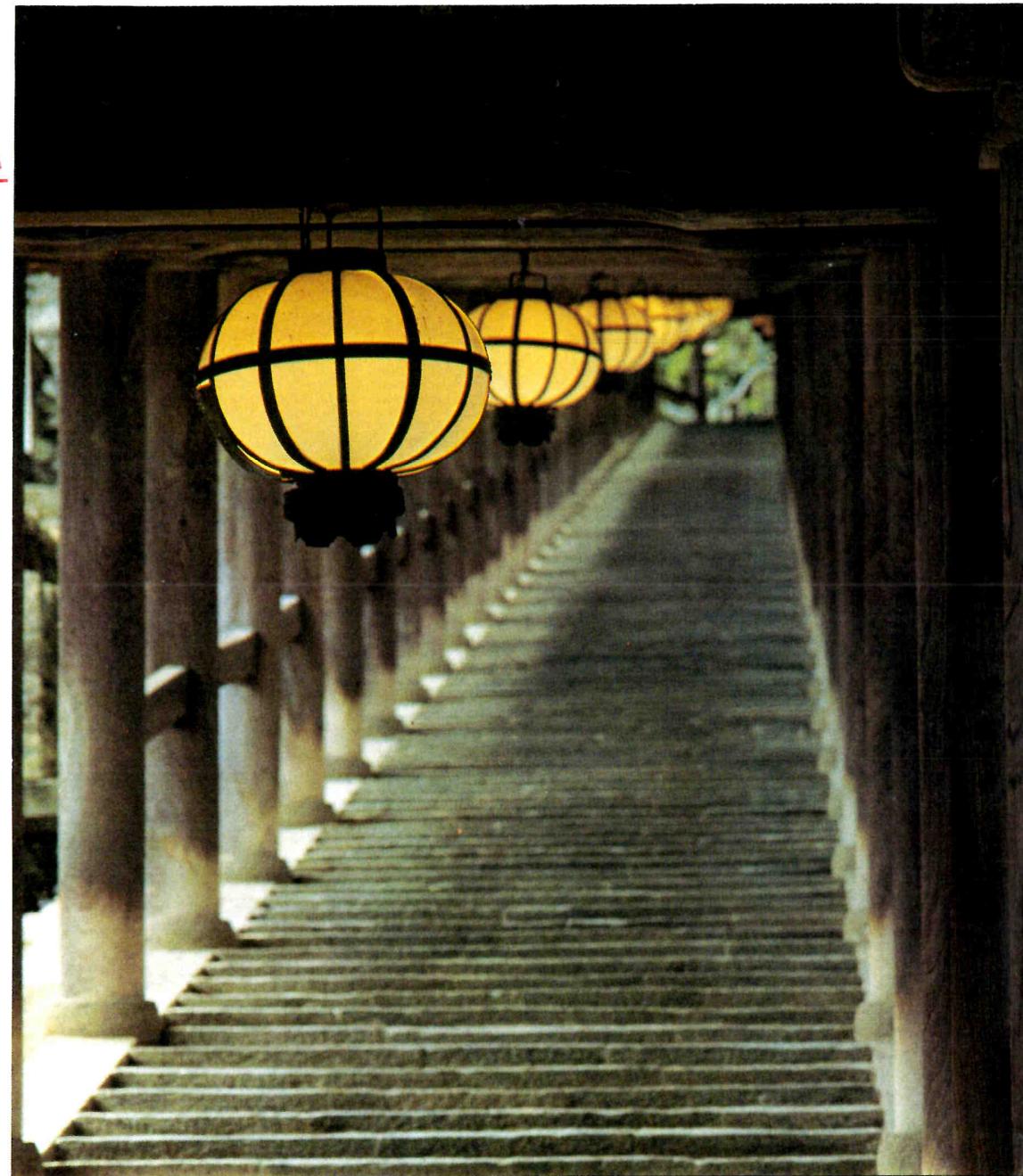


5.443^P

・カラー

・右頁下半分に、下方へ↑
はみ出しが大きく
掲載下さい。

・出来ただけ、明るく
お願いします。



カット↑

長谷寺・室生寺
田中昭三 見開主
地図有る。

長
谷
寺
室
生
寺
田
中
昭
三
見
開
主
地
図
有
る

13QG

14QG 写真図版 800 長谷寺の登廊

『長谷寺』竹西寛子・川田聖見、淡交社、昭和55年1月20日発行、No.8 参照

101^P

・カラー
・左肩全面に、はめ出17
・大木大載せ。

・暗くない
・よろこび
・明るくお嚴
・ほほ。

5.444

地蔵と
般若菩薩
釋迦如來
5829
-13
162
1994



1329

1406

801

尼真岡版

はせでら

長谷寺

十一面觀音像

(像高10m余り) 重文(木造)

平成24年10月29日

1329

古色大和路

入江泰吉

記念奈良市尼真

美術館

平成24年10月29日

右手に金錦襷

と念珠

左手に水瓶

を持

て(13)

(第13巻464頁参照)

(44)

5.445

かと思つた小町が、連れの人をやつて見てじきせたところ、籠つてゐる局のかたわらに経を讀んでゐるのは誰だらう

以下、「遍昭集」参照

ことに、……またもや、あのなつかしい声を耳にした。て、「長谷寺」へやつて、小町は、何とも不思議な

俗世間をつかしい思いで見ていたのではなかろうか。
齊衡二年四月当時、遍昭は比叡山へ登る日を前にして、……

社、二二七頁参照

ことになる。「慈覺大師伝」。小野小町「小林茂美、桜楓
たる右大臣藤原良房の配慮によつて比叡山へ登る
遍昭はこの直後の齊衡二年（八五五）五月、従兄弟にあ

■そして予め述べると、

と考へてみた。

長谷寺へやつて、小町は

遍昭は、石上寺・清水寺など世間世界を行ひ歩いた後に、

■この物語では、

うに思われる。」「大和物語」一六八段参照

界を行ひあけるわけはなく、話の筋として無理があるよ
があけたと記述しているが、——わずか一年間で、世間世

「長谷寺」へやつてきた後に、仁明天皇の御喪（一ヶ年）
●なお、「大和物語」は、遍昭が世間世界を行ひあつて

答歌を載せている。

至つたと述べており、このあとに、小町と遍昭の一人の贈

歌い、そのちいさな歩き仲間、「長谷寺」に

昔のたもとよかはきだにせね

みな人は花の衣になりにけり

過ぎて御ふくぬぐ時に、遍昭が、

・群書類從本「遍昭集」は、仁明天皇の崩御後一年が

いたのである。

五五 初夏頃には、泊瀬の御寺「長谷寺」に於て修行し

つをうち着て、世間世界を行ひあるき、この齊衡二年（八

五〇）三月十八日に出家し、石上寺、清水寺等、蓑ひと

遍昭（良岑宗貞）は、仁明天皇崩御直後の嘉祥二年（八

*

想像される。

の「長谷寺」で、小町はついて、遍昭とめぐり会つた

そして、……とても信し難いよつたとはあるが、

小林茂美、桜楓社、二二〇頁参照

をする奇遇の場所として特筆されている。」小野小町「

おける泊瀬・清水の地は、人と人との邂逅めぐりあり

新しく歌を作つて贈るかとも思った。
せしめたいたいわ。どう言つたものかしら
私がこの長谷寺に来ていてるといつて、どうにかしてお知ら
と思案した。
しかし、それでは、
用た頃には、僧位も上がり、遍昭はかなり立派な衣服を着
ておりました。お話をなど致しとう存じます
この時、石上寺でお会いした私小町が、この長谷寺に来
といつたが、——端的(手みじか)には、少将良岑(遍
昭)様に伝わらないに違ひない。

●おそらく、世間世界を行ひ歩いた後に「長谷寺」へ来
た頃には、僧位も上がり、遍昭はかなり立派な衣服を着
ておりました。このひひとつ着る法師が、豊やかに隅の方に居た
●この物語では、
「かたにあて侍といひければ云々」
とあるが、しかしだけであります。
「みのひひとつ着る法師が、豊やかに隅の方に居た
とあるが、しかしだけであります。
●清水寺で養ひひとつ着ていた法師が、長谷寺では豊やか
姿をして隅の方に居た
●この物語では、
「耳をたてて聴くに、その僧侶の声は、いと尊く、心に深
くしみじみと滲み透るようであつた。
●たゞ人ではなゐわ。少将良岑(少将良岑)は、いとれ大徳(大
きな徳のある人)になられるにあつた。そして、

・カラーで「印刷」して下さい。
・左頁の下半分に、大きくは4枚、17掲載下さい。

105^p

通昭

5.447^p

105



1409

第541 図 通昭 (上ヶ豊本三十六歌仙繪)

1304

『日本繪卷物全集』三十六歌仙繪 角川書店 昭和42年12月30日発行

43頁参照

ルビ「有三

老の字

老の字

老の字

（* 豊の上に座った人物を描いているので、『上ヶ豊本』の名がある）

古今和歌選り吟

『日本繪卷物全集』角川書店、1頁に上ヶ豊 (Age datami) とある

5496 修正版

×遍まん昭あきら

173

た笑顔わらわらで聞いていた。見つめる綻ほころんだその目には、心をな
じませる柔和じゅわな優しさがあった。

小町は、その穏やかな微笑みにスッと引き込まれしていく
よう得もいえない安らぎを感じた。そして、言葉では言
い表わせない心地よい嬉しさを覚えたのだった。

小町は、宮中でのいろいろな珍しい儀式ぎしきのと、や
楽しかった出来事などを、おもしろげに語った。

「私、昨年十一月の新嘗祭しんじょうさいの五節ごせつの時にね、美しい着物きものを
着て、皆が見ていた前で舞まいいを舞ったのよ。初めてのことに
だつたから、間違えないようにするのが精一せいいつ杯ぱいで、まるで
フワフワした雲くもの上で踊はねつていてのような気がしたわ」

*

初瀬川上流の觀音山中腹に巍然と聳える「長谷寺」で遍まん昭あきらと小町とが再会したのは、もししかしたら、四月の上弦じょうげんの
月つき半はん月つきが西の空に傾きかけていた頃ごろのとおりだったか
も知れない。

時折、雲と雲との間あたりがぼつと明るくなつて、そこ
に月があるのだといふのが、そんな音のとおりである
たるうか。

天空を吹き渡る風に乘つて、雲くもが流れゆへ。アーヴ
小町のたわいもない愛らしい話を聞きながら、……、
していふ風情ふぜいの小町のおしゃりを、遍まん昭あきらにはじめていた。

5.4.4 8^P

可憐な書かずがふくらんで、いままさに美しい花にならうと
小町は語かたつた。

これども、お会い出来なくて大変心残りだつた。等々、
れば「歌を差しあげた」と。返歌かえうたを頂いて嬉うれしがつたけ
と。清水寺で懐かしいお声を聞いて、「岩の上に旅寝たびねをする
贈答歌さしあわせうたの」と。祖父じい父ちちと石上寺いはうじを訪おとねたこと。宮中みやなかに上がつたこ
四年前に、祖父じい父ちちと石上寺いはうじを訪おとねたこと。忘れられない
がきへようになつていたのかも知れない。

僧位そういの上あがつた遍まん昭あきらは、じつした時に多少なりとも融通ゆうつう
やがて、艶あでやかな姿なまこがたの僧そうがやってきた。
と思い、胸むねをときめかせて訪おとねていた。

ひ、もう一度会あってお話をしたいわく
» あんにも親しく言葉ごんばを交かわした間柄まんへいのですもの、せ
喜んだ小町は、

「まあ、やはり少将さしょう良寧よしむら少貞さうしやう様さまのね」

と書きお送おくりつてきた。

かひねはうとうとひふたりねむ
山ふしの苔くしの衣いは只ただひとへ

するこ遍まん昭あきらは、いままた少し變かえて、

と書いて届とどけさせた。

心ときめへひととまを廻りしてました
それは乙女の歌らしくさんだ、好みのものてる歌だった。
(群書類從本「小町集」)

久堅の月のかくる道まとは
天つかせ雲ふきは
頬をほんのりと赤らめながら、小町は歌った。
お困りになるわ

私、どうしていいか戸惑ってしました、お月様もいたそう。
え、そのようないでしゃしゃてはいけません。

面映ぬもあつた。
天女にたゞやられた小町は、すがに嬉しかったが、
何といつ美しい歌なのでしゅう。
小町は、その遍昭の歌に、うつとりした。
て、私にゆき見はせてられないか。

いから、天界へ帰るうとする乙女の姿をじてじめ
う通路を遮断しておへれ。そしてしばしばの間だけでも
天つ風よ。雲をたくさん吹きつけ、雲の中にあるとい
(古今和歌集「卷七十八」。小倉百人一首)

とめの姿をはしてとめ
天つ風雲の通ひ路吹きとめ

心に浮かぶ井井に、遍昭は歌つた。
遍昭は、小町の姿を、まぶしそうに見つめていた。
なんとも優雅なひとよ。

天に近い初瀬の山に、天女のよつに麗しい乙女がいる。
には、小町の清楚な美しさと重なって見えていた。
そんな記憶のなかの舞姫の姿が、——いつしか遍昭の目
懐かしい思い出が、遍昭の胸中に華やかによみがえった。
(古今和歌集「日本古典文学全集、小学館、二二二頁、注
記参照)

終えて退出する舞姫を、空を飛んで帰る天女に見たてて歌つ
大嘗祭の日(月)を中心として繰り広げられる五節の時に舞
つまり、良岑示貞は、陰曆十一月中の卯の日(新嘗祭)。

(群書類從本「遍昭集」)

この歌は、五節のころ舞姫を見て詠んだものである。
をとめの姿をはして見るへ
天つ風雲の通ひ路吹きとめ
た。
は、宮仕えしていた時に作った舞姫の歌を思い出していく

5.450

五〇八年の政治は、母(仁明天皇后順子)の兄文徳天皇(仁明天皇の第一皇子。八七八五年在位)

尚、「応天門の変」の概要について、予め述べておく。

大事典「谷山茂、むさし書房・藤原良房」参照

界から追い、藤原氏の摂関政治の基礎を確立する。」人名稿

に際し巧みにこの変を利用して大伴(伴)・紀の両氏を政

その後、藤原良房は、貞觀八年(八六六)の応天門の変

して、最初に摂政の地位についたのだった。

ここに、藤原良房は、清和天皇の摂政となつた。臣下と

「清和天皇」(藤原良房)。「広辞苑」(清和天皇)参照

觀一八(一)である。」日本史辞典「東京創元社」文徳天皇

和天皇(八五〇)八八〇。在位八五八(八七六)天安(貞

皇の第四皇子)惟仁親王が、九歳で皇位を継承された。清

れると、藤原良房の娘明子が八五〇年に生んだ文徳天

文徳天皇が天安一年(八五八)八月に三十一歳で崩御さ

「人名大事典」谷山茂、むさし書房・藤原良房。他参照

大臣・左大臣を(天安元年(八五七)太政大臣に)進んだ。

藤原良房は、文徳天皇の即位後、外戚として権を得、右

明天皇(文徳天皇)参照

社「文徳天皇」。『皇室大百科』朝日通信社、二〇一頁仁

藤原良房を中心にするめられた。」日本史辞典「東京創元

小野貞樹

」小野小町(小林茂美、桜楓社、二二七二三〇頁参照)

そして遍昭は、後にはついに僧正にまでなつたといつ。

たのだった。(慈覚大師伝)

従兄弟にあたる右大臣藤原良房の配慮によつて、叡山に登つ

先に述べた通り遍昭は、齊衡(一)年(八五五)五月、

日々を過ごしていいたのである。

遍昭はこの頃、比叡山に登るための準備にあわただしい

消えたようになつてしまつていて。」(遍昭集)参照

しかし、どうしたといつだらうか。遍昭はやは、か

小町はそう思い、遍昭を訪ねていて。

「こんなにも親しく言葉を交わした間柄になつたのです

の、……もう一度お会いして、お話をしたいわ」

次日の朝のことであつたろうか。

*

もかえがたいたい樂しい限りのものであつた。

打てば響く遍昭と小町の応答は、一人にとつて、何事に

遍昭と小町とは、こうして別れた。

朝堂院の正明を、「心天明」と呼んだのだろう
成周(洛陽)の移り変わりを知悉してい、……平安宮の
・平安時代の最高權力者達は、周初頃から以降の洛邑

■ えて述べると、
想像される。
第14図参照)

第5図・第6図参照)の正門『応門』に由来しているのかも知れない。)

85% of 100 = 85

○正月十六日（元和二年正月十六日）天皇の貞觀八年（八六六）の六年前、——貞觀二年（八六七）小野貞樹が肥後守となりたのは、応天門が炎上した清和わ（元和二年正月十六日）ではじに、「三代実録」から、「肥後守」の記事を抜粋

*
実錄「清和天皇の貞觀十三年十月二十一日条參照」

朝堂院の正門を、『應天門』と呼んだのだろうかと思われる。(第十八章)應天門の項において既述。」〔二〕代

→平安時代の最高權力者達は、周初頃から以降の洛邑・
成周(洛陽)の移り変わりを知悉してい、……平安宮の

第14図参照)

楼う(翔鸞樓う)が立てられていたのではなかろうか。(12)

②また、朝堂院の正門『應天門』の両そでには、周代後半から後ちの様式にならって、『闕』、すなわち『樓觀』(樓觀は鳳樓)のうちの

第5図・第6図参照)

の正門『応門』に由来しているのかも知れない。) (赤口トトロ)

185 (1) 面

5.451^P

①平安時代の朝堂院の正門『応天門』は、周初の頃の宮室

✓ 100000

「日本史辞典」東京創元社〈応天門の変〉参考
四頁。) といふ。(「日本の歴史」(3) 平安貴族、読売新聞社、七一~七
一人とも、その後の消息については伝えられていない「
て都を後にした。

だ。人民は、声をあげて泣いた。
伴善男は、伊豆に流れされることとなり、護衛兵に囮まれ

井・播磨介・譲岐守・肥後守を歴任)もいた。
井 播磨介・譲岐守・肥後守を歴任)もいた。
肥後守紀夏井が土佐国へひかれて行く道の両側にならん

その中には、善政をしたいにくしくしてなんだかひごのなかみのなつたたかくいた國司として名高い肥後の守紀夏

の放火とされ、伴(大伴)、紀西氏あわせて八人が遠流と
はうか
され、
とも
き
の
月
一
日
半治
か
ト
ナ
セ
ム
ル

といふ返事だったので、今こそく逮捕をやめさせた。

件への対処方を問い合わせたが、天皇の関知しないことだと
太政大臣藤原良房は、すべに参内し、清和天皇にこの事

屋敷に逮捕の兵をひし可かしにした。

である『應天門』が燃え上り、両そでの樓鳳樓、翔鸞樓も類焼。大納言伴善男は、左大臣源信に容疑をかけ、その

109

なお、『新・やまと物語』の本文中において詳述する

春日神社および靈雨山神社を創したのではなかろうか。
古采菊池を本拠地としてきた中田氏が、この山を崇拜して、
木葉山は菊池盆地の入口にひとりわざく時つ山から……
山。五万分の一地図参照

貞。『熊本の山』今江正知、熊本日本新聞社、一四貢へ木葉

名著出版へ木葉山。『熊本の伝説』荒木精之、角川書店、七一

山頂には靈雨山神社がある。(『帝國地名辭典』太田爲三郎、

には、約一二〇〇年前に造営されたといつ春日神社があり、

合志の七国神社から見て西方約九キロに聳える木葉山の麓をも

という麗い山(三八二)がある。(『新・やまと物語』別名、靈雨山)

因みに述べると、肥後国には、『木葉山』別名、靈雨山

*

述べた。

そして、肥後守となつた小野貞樹の前途には、暗雲が待つ
ち受けいたようだが、——このことについでは、追つて

分かる。

(八六〇)春正月十六日から、同年の冬十一月十七日以前までの、……極めて短い、一年足らずの期間だったのが
日条に、

■貞觀八年(八六六)十一月十九日条。

善男。應天門火。云々(後述)

不^レ全。吾子其^レ終乎。遂^レ詫^レ身^レ大納言^レ伴宿^レ詫^レ之^レ人

の^レ貞觀七年拜^レ肥後守^レ紀朝臣夏井^レ配^レ士左國^レ。……昨年

「從五位上行肥後守^レ紀朝臣夏井^レ爲^レ肥後守^レ」

■貞觀八年(八六六)九月二十日条。

散位從五位上紀朝臣夏井^レ爲^レ肥後守^レ」

■貞觀七年(八六五)正月二十七日条。

あり、藤原朝臣眞數は十年後も健在だったことが分かる。

「散位從五位上藤原朝臣眞數^レ爲^レ刑部大輔^レ」

尚、十年後の貞觀十二年(八七〇)一月十四日条に、

「從五位上行大宰少貳藤原朝臣眞數^レ爲^レ肥後守^レ」

■貞觀二年十一月二十七日条。

「從五位上行大宰少貳小野貞樹^レ爲^レ肥後守^レ」

■貞觀二年(八六〇)正月十六日条。

存^レして^レいた、といつこと^レが分かる。

「大納言正三位藤原朝臣冬緒^レ爲^レ兼彈正伊^レ」

という任官記事があり、元慶八年当時、藤原朝臣冬緒は生

尚、一十五年後の光孝天皇の元慶八年(八八四)二月九

「從五位上行大宰少貳在原朝臣安貞^レ爲^レ肥後守^レ」

日条に、

大納言正三位藤原朝臣冬緒^レ爲^レ兼彈正伊^レ」

わが心はこれまでのものと違つたのですね。

とにかく木の葉は、風に吹かれて散り乱れましたよ。が、こんなに木の葉であつたならば、私の心は木の葉と違つて決して散つたり乱れません。たゞたゞあなたを恋しく思つてゐるのです。

この賛うたの歌は『古今集』卷第十五、恋・歌・五に収められておりせずただただあなたを恋しく思つてゐるのです。

なお、貞樹の返歌の「そ」の結びは末句の「め」である。

なるほど、小町の歌には、「わが身時雨にふりぬれば」
とある。

しかし、だからといって言葉通りに、「小町がかなりの年になつた時の歌だ」と解かず必要はないまい。

恐らく、
肥後国に赴任した小野貞樹からのたよりは、何故かしら
途だえがちなの、……ひしひしぶりに届いた文は粗雑で、
誠意がこもつておらず、時ばかりが移つてゆく。

といふたほどの意味なのです。

5.453 P

私はもう秋(厭)の時雨(通り風)にかかるんだように、風のまにまに散りも乱れめ

あなたたの記憶のなかでは古びてしまつたのでしょ。お心が冷たくなつたつて、お言葉はまだが秋の木の葉同様に変わらぬ秋(厭)の時雨(通り風)にかかるんだように、

人を思ふ心の木の葉はあらばこそ
返し

言葉さへに移ろひにけり
今はとてわが身時雨にふりぬれば
じう歌つた。

その文面を見た小町は、……すこしめかりすねてみて、

それは、走り書きの便りだった。

新しい任地肥後国で苦労の絶えない懐かしい日々を過いでいる貞樹のものから、京の小町へ文が届いた。

その時、小町は二十歳であつたろうか。

たのである。

さて、たぶん清和天皇の貞觀一年(八〇〇)秋のことだ。
地だつたのだろう「菊池盆地を中心とする一帯が、そもそもの中臣氏の本拠」と想到される。(枚岡神社・春日神社あたりの地勢、他参照)

れな
い。

● 或は、あまりにも清廉で妥協を知らない小野貞樹は、肥後国の在来保守勢力の反発を招いて、殺されたのかも知

六九貢參照

樹の記録は見当らない。『小野小町』前田善子、『省堂』一
それにしておどついたのか、『肥後守』以後の小野貞
樹き

*

系、岩波書店、一八三頁參照)

とある。(『竹取物語』・『伊勢物語』・『大和物語』) 日本古典文学大

風かぜのまことにせんざりもみだれめ
人を思ふ心のはな(花)ばいそ

か返し、紀元文(行記未詳)。小式部内侍本に「此の御おみを

今はとてわれに時雨ふりゆけば
に厭気がさして來た(男のものに)
むかしありける色好みける女、あ

■また、参考迄に述べると、『伊勢物語』一二一 段には、

○記号の意味

風のまことに生に散りも粉けめ
人を思ひ心の葉かみあらははいそ

5.454^P

しか

今はとて我身しへれと降ぬれは
忘れぬるなめりとみえし人に

なお、群書類從本『小町集』には、

「言の葉へは移ろひにけり」と嘆いていたが、心に感じられる。

好きだからこそ、小町は、

小町の歌には、恋の心がある。好きでもない男に、この
よくな歌を作って贈るといつてはあるまい。

そしてまた、小町の方も、眞実は眞誠を惜からず想ひて

その当時、小野のまき貞樹が何歳であったのか知る由もないが、肥後守小野朝臣貞樹は遙かに遠い九州の肥後国にてあって、都にいる小野小町のことを、深く愛してはいたが、

この歌を詠み送ったのだろう、と推察される。

秋に、——小町は、貞樹の心の内を確かめようとして、つまり、貞觀二年（八六〇）、小町が二十歳であった年

る。
説が契沖 (江戸前期の国学者・歌人) によつて提唱されて
● 小野町と同姓であるといふから、親類であるといつてする
たのだらうか。

■ それでは、『肥後守小野貞樹』とはどんな氏姓の人だ。

*

けるといつての出来ない面があるたのかも知れない。
時の朝廷はついへぶん遠慮があるて、力もつて押さえつ
・ 天地開闢以来の長い歴史をもつ肥後国だからこそ、そ
ない独得の気風を受け継がれていたのではないか。
・ 他の国々とは違つて肥後国には、中央政権をも意に介さ
は我が子の不幸を予感して哭いたものと思われる。
あまりにも記憶になまなましかつたからこそ、紀夏井の母
樹から幾名かの者達が、悲惨にその身を全う出来ず、
前の貞觀二年 (八六〇) 正月十六日に肥後守に着任した小野貞
十七日ほんの数年前の清廉潔白な何人かの肥後守 (五年
・ 紀夏井が肥後守に任命された貞觀七年 (八六五) 正月一
廉んで死に至つたと解される。

るのだから、……前々任者「小野貞樹」以前の数名が、清
觀十二年 (八七〇) 一月十四日に刑部大輔に任命されてい
・ もともと、紀夏井の前任者「藤原眞數」は、この後の貞

5.45P

ようちに理解される。

めにその身を全う出来なかつた
これまで以前の肥後の国司の幾人かが、清廉であります
・ 即ち、紀夏井の母の言い方から推し量ると、
味のあるう。

・ 「身必不全」とは、……「致命傷を負つた」という意
と嘆いたという。

「聞くところによると、肥後の風俗上、国司が清廉である
と必ず身を全う出来ます。吾が子もまことに終りを
任命された時、夏井の母は歎哭し、

・ つまり、貞觀七年 (八六五) 正月、紀夏井が肥後守に

子其不終乎」
苔曰。吾聞。肥後風俗。國宰至清。身必不全。吾
年撰肥後守。母石川氏聞而哭之。人問其故。
「肥後守紀臣夏井配士左國。」昨年の貞觀七

一一条に、先述の通りつ記されてゐるからである。
・ といふのは、——『三代実録』貞觀八年 (八六六) 九月

十一月十七日 (後任の藤原朝臣眞數が肥後守となつた日)
そしてそれは察するといふ、……貞觀一年 (八六〇) 冬

以前のことであつたう、と思われる。

後國の保守勢力との激しい抗争に明け暮れる心労の日々を
肥後守としての任務を全うしようとする小野貞樹は、肥
送っていた。豈つかうつか。

*

の歌参照

堂、一六九一七年正月十六日

甲斐守となり、小野貞樹は、仁寿三年(八五三)十月十六日につまり、小野貞樹は、仁寿三年(八五三)十月十六日につまり、小野貞樹は、仁寿三年(八五三)十月十六日

(文徳実録)

「従五位上行大宰少貳小野朝臣貞樹爲肥後守」

天和貞觀一年(八六〇)正月十六日

「小野朝臣貞樹従五位上」(文徳実録)

齊衡一年(八五五)正月七日

「古今集」卷第十八雜歌に、この頃の歌一首がある。

「小野朝臣貞樹爲甲斐守」(文徳実録)

仁寿三年(八五三)十月十六日

「従五位下小野朝臣貞樹爲刑部少輔」(文徳実録)

嘉祥三年(八五〇)八月五日

「小野朝臣貞樹従五位下」(文徳実録)

天徳嘉祥三年(八五〇)四月十七日(文徳天皇即位の日)

5.456

「任東宮少進」(古今和歌集目録)

天明嘉祥一年(八四九)閏十一月九日

■小野貞樹の経歴は、諸書によると、次の通りである。

「一七一頁参照」

でないことになる。「小野町」前田善子、三省堂、一六八
そしてもしもそつなら、小野貞樹と小野町とは、同族
高階氏を賜り、弟貞樹は小野氏を賜った、のかも知れない。
あるいは、仁明天皇の承和十一年(八四四)、兄峯緒は
峯緒の弟に当る(?)となり、年代としてはほぼ一致する。
とはいえ、もしこれが脱落であるとするならば、貞樹は
の名は見当らない。

と記されているだけであり、また石見王の御子の條にも其

「峯緒従四上右中弁」(高階真人姓)

「丹波山城守神祇伯

天武天皇 高市親王 長屋王 桑田王 磯部王 石見王

王の所には、しかし、『皇胤紹運錄』・『大系図』の高階氏の系図石見

の御子」という。

・一方、『勅撰作者部類』は、小野貞樹について、「石見王

はないようである。

けれども、小野氏の系図に貞樹の名は見えず、特に根拠

かりであつたろうか。
そして又、全ての経緯を知った時の小町の悲しみは、ど
んなであつたろうか。
「貞樹様は、肥後国で大変な御苦労をなみておられたの
だわ。そうした事を露はども知らなかつたとはいえ、
あの時は、何とひつひつ心ない歌をお送りしたのでは
小町は、自分のことよくなへ愛しながら痛らぬ人となつ
てしまつた貞樹を慕い、胸ふるわせて泣き崩れた。
「貞樹様。私の貞樹さま」
目を泣き腫ししながら、小町は、茫然失の日々を過ぐ
はじつて、数年の時が、瞬く間に過ぎ去つていていた。
平安時代初期の六歌仙の一人である『文屋康秀』について述べておいた。

文屋康秀

（1）『中古歌仙三十六人伝』によれば、「先祖不見」
（2）『勅撰作者部類』によれば、「縁殿助宇千の男」
とり、文屋康秀は一生地下（清涼殿に昇殿を許されない官人）で終つた人のようである。

・『古今和歌集目録』を基にして、その略歴を見ると、

5.457
といつ知らせを聞いた小町の驚きの大きさは、いかば
恋する人が、遠い故郷『肥後国』で無残にも殺された
た。
ところが、この返歌が、貞樹の辞世の歌となつてしまつ
て悲しく思つてゐるのです

いえ、とんでもありません。私はただただあなた

小町の問い合わせの歌に、貞樹は慌てた。
私は小町に獻ておしまいになつたのでしてやうか
おれなかつた。

ここに小町は、歌を作つて、貞樹の心を確かめてみますに
私のいじい貞樹様は、どうがさつたのかしく
さに、心を痛めた。

など知る筈もない小町は、——その文のあまりのそりな
しかしながら、貞樹が切迫した状況の真只中に居ること
届けた。

よつやく一通の文をしたため、都にいる小町のもとへ送り
だが、心安まることにの無い緊張した時を割いて、貞樹は
い辛い毎日が更に続いていたようと思われる。

そして幾通もの小町からの手紙に對して、返事も出来ない
いた便りがえなかなか書けなかつたのだろう。
そんなわけで小野貞樹は、愛する小町に宛てて、気のき

歌詞の中に「頭の雪」という語があるだけで、もはや、餘程の老齢と見ねばなるまい。本居宣長は江戸後期の国学者(は)、この時(貞觀十八年)、本居宣長六十歳と見ていく。文屋康秀(ぶんやう こうしゆ)は、本居宣長のいの仮説にて、そして前田善子氏(まえだ ぜんこ)は、本居宣長のいの仮説にて、文屋康秀(ぶんやう こうしゆ)は、貞觀五年(八六三)頃と推定している。「小野小町」前田善子、三省堂、一九一〇二頁。「小野小町放」小林茂美、桜楓社、一〇八頁参考。四十七歳の頃(こどり)であつたらう。文屋康秀(ぶんやう こうしゆ)は、貞觀五年(八六三)頃に任官されたのは、貞觀五年(八六三)頃とされるが、この説によれば、文屋康秀(ぶんやう こうしゆ)が三河掾(みかわのじゅう)であつたのは、貞觀五年(八六三)頃から以後、元慶(げんけい)元年(八七七)正月十五日(山城大掾(さんじやう)をいふ。)「大字典」上田万年、講談社(こうだんしゃ)據(うつ)。地方の第三等(だいさんとう)と良実(りょうじつ)と小町との出会いの項。第657表参照(ひょうじょう)。■なお、「據」は、我が国古官制において、地方の第三等(だいさんとう)といふ。任官(にんかん)迄の間だったぐる。

天清貞觀二年(八六〇)三月廿日 任ニ刑部中判事。天皇元慶元年(八七七)正月十五日 任ニ山城大掾。元慶三年(八七九)五月廿八日 任ニ縫殿助。とあるだけで、——文屋康秀が三河掾になつた年月も不明であり、年齢も亦知る術がない。唯たたかの手懸りとして、『古今集』巻第一、春歌上、八に、一條の後の春宮の御息所ときこえける時、正月三日お前(御前)に召して仰言ある間に、日は照りながら雪の頭に降りかかるを詠ませ給ひける。春の日の光にあたるわれねれど、かしらの雪となるぞわびしき。いう歌がある。

これとても確かな年齢は推定し難いのであるが、一條の皇后を東宮の御息所(皇子妃)と申し上げていた時代は、貞觀十一年(八六九)陽成天皇が立太子されてから元慶元年(八七七)即位される迄の八年間のことであり、御前にてこの歌を詠み御感あつて幾許もなく山城の大掾の官についたものと推定すると、——この歌は、貞觀十八年(八七

この歌は一見、
「私は悲觀して心細へ暮らしていのだから、身を憂く思
い(い)らる(い)、——根なしの浮草が水の流れに誘われ
てへへつて、(い)て、(い)なりと參りましゅう。「
と、快諾(はやか)の意に迷へておへり。
しかし、(い)あ「私の仮定法を、見のがしてはならない。
「あ(あ)は「私の仮定法は、」(い)と(い)う断定の婉曲表現で
ある。
すなわち、文屋康秀の誘(い)の言葉を、小町は表向きやん
わりと、だがきほりはりはり。
「誘(い)う水があるたら行きましゅうが、貴方なんかのところ
にはまいません。

また、句の「往(む)な」は、拒否する意味の「否(い)
(い)が効(き)かせてあるのかも知れない。そのように解か
しにくくなるほどの、「誘(い)う人があなたでは嫌(いや)
だ」という拒絶(きせつ)を、ねばねばとちとちとれるような表現で返し
たのだった。」小町攻(う)小林茂美、桜楓社、一〇三〇五の注
頁。「古今和歌集」日本古典文学全集、小学館、二五二頁の注

解参照(一)

*

5.459

わびぬれば身をうき草の根を絶て
誘ふ水あらばいなむひと思ふ

小町
の
町

ける返事によめる

私の任国をじ想(おも)におりてありますとか(と)言ひやれ
り文屋康秀が二河(ふたかわ)にありて「見(み)にはえいでたじ
『古今集』卷第十八一九三八に、こ(こ)う記(き)されて
は手紙を送(おくり)たのだろうか。

死んで、それからと(い)うもの失(うしな)いの意(い)どん底(そこ)に打ちひしがれ
て文屋康秀は、二河(ふたかわ)となつた頃(ごろ)ある時、——小野
観(かん)一年(八六〇)の秋(あき)もしくは初冬(はつとう)に小野貞樹(おののき)が
小町に文(ふみ)を送(おくり)た。

さて文屋康秀は、二河(ふたかわ)となつた頃(ごろ)ある時、——小野

863
841
23
22
22

・同年、小野小町は一十三歳(じゅうさんさい)であった。

・貞(かん)五年(八六三)、文屋康秀は四十七歳(よじゅうしちさい)の時(とき)に二河(ふたかわ)

が多いが、『文屋康秀』についてはあまりにも不明(ふゆ)な点で
の歌で知(し)られている。

『古今集』卷第十三、恋歌二、六五六には、次の小町の歌

か。

とすれば、小町の意中の人とは、一体誰だったのだろう。

*

といふ意味をも含めて歌つたよつに察せられる。

いふ方と違つてすもの、否むしかないわく

きたいのだけれど、誘つててくれたのは、思いを寄せてあるの方が誘つて下さつたのなれば、じいへなりとおり往々

も知れない。

まかせないわびしきとを、歌い込まずにおれなかつたのかと小町は、胸の内に揺らめくほのかな恋心と、思つてなるほど、文屋廉秀には気の毒な歌だが、——しかし

照

なのである。(小野小町攷) 小林茂美、桜楓社、一〇四頁参

「もしも誘つ水があるたまうのは、ひどいと/orい」 そもそも、文屋廉秀といつ誘つ水を前におみがら、と歌つてゐるよつて思われる。

いのに、……

その方が誘つてなる水にはいは、喜んで流れで行つた

つまり、

恋心を抱いていたのではなかろうか。

しゅうじいみす「(古今和歌集)日本古典文学全集、小学館、一六八頁の注解参照)

実際に、貴方様がお見えへだつて、夢かと思つばかりに嬉れでした。……それなのに何と今日は、夢などではなくて現げ気にしてじりじりしゃしゃと思つて、私は悲しくてなりません現われては下さないのです。夢路においても、人の目をしよう。ところがつれぬへもあなた様は、夜の夢に見えます」屋の間は人目を忍んでおいでになれないといつておひこま

小町は、心がふるふるばかりに嬉しかつた。

お方が、忍んでおいでになつた。

そんなあどかしくてそきなじとや……

かつたのである。そのため、おいそれとは逢つといすとばかりなまき尊貴な方であつたのかも知れない。

あるいは、小町の恋の相手は、おそれ多くあやといつ詞書が添えられてゐる。

「やむことなき人の忍び給に」

そして、この歌を收めている群書類従本『小町集』には、

夢にみた人日をよくと見るがわびしき
うつしにはみやうてあらめ

小町は、その気持を歌にしたのかも知れない。やんじとはそのお方との話もはずんで、小町は幸せの極みにあつた。

*
この歌を詠んでから的小町は、以前にも出して、そのお方たのおいでを心もそろに待ち焦がれた。「いやほ、いやつお見えへだひるかしら」それにしても小町の歌に、《夢をつたひ込んだものが多い》といふは、人々の注目するところである。(以下、「古今集」及び「宫廷を彩る才女」暁教育図書館、七九頁参照)

(55) 思ひつづく寝ればや人の見えつらむ
夢と知りせば賞めはらしましを
うたた寝に恋しき人を見てしより
夢てふものは頼みそめてきて
恋しい人のことを夢みにみた小町の醒めて後の心残り、また夢に見たいといつ望みが、切なげに歌われている。

(56) いとせめて恋しきときは
うはまたの夜の衣を返してぞ着る
恋へてじうにもがらない時、私は夜の衣を裏返しに着て寝るのです。」(「またの」は、夜・黒などの枕詞)

そこで、小町の時代に於いて「四のみこ」又は「四の宮」と称されていた可能性のある御方々を挙げてみる。

「やんじひとなまき人」で、小町が最も心を傾げ、して愛し奉った御方である、と小町の歌から推察される。そしてまた、「やんじひとなまき人」とは、すなはち「四の」四の「いのねのねのねのね」と思われる。

一九八三〇一頁參照)

では、あくまでも実証のない推定ながら、——やといひとみき人」及び「四のみ」については、「小野小町「前田善子、三省堂、

*

美、櫻楓社、三七六、三九三頁參照)

としめる「秋風の吹くころに泣いた」(『秋風の吹くころに泣いた』)は、この歌の題名である。歌の歌詞は、秋風の吹き方に感動して涙を落す女性の心を表現している。歌詞は、秋風の吹き方に感動して涙を落す女性の心を表現している。

一見したくなる秋の和風アート

といふ從來から、一・二・三・四句を

かかへふよりは「三句か一吹風や」とある。

5.463 P

また、神宮文庫本『小町集』(一五番歌)では、詞書がある。「四のみのいせ給へる比、風のふきしに」とあり、初句

今朝よりはしづかの山風や
四のみひのいはひたすらめて、風吹へに
『小町集』(歌仙家集本) に

である。『枕草子』の冒頭に「冬はひとつめでく」とあり、よへ知られる
ことである。江戸前期正保二年（一六四六）版の流布本系

ところが、小町の心の中の大きな存在になつていいたと思われるそのお方が、——ある年の『秋』に、お亡くなりになつてしまつたようである。

121

年四十一歳であるから、逆算すると、——人康親王が生まれたのは天長八年(八三一)、出家したのは貞觀元年(八五

・「一代要記」に「貞觀十四年（八七二）五月五日薨^{アサヒ}、
觀元年五月七日の条」

『録』によると、少年の時より大乗道に帰依する意志をもつていたが、今、病と謝して遂に本懐を上げたのである。(貞)

表し、許されて同年五月七日出家入道している。」三代実じ 桂王・宣賀を詠しナヒ見る」

たが、貞觀元年（八五九）一月から高熱におかされて、氣き

四品に叙され、嘉祥三年(八五〇)に上総大守、仁寿二年

●仁明天皇の第四皇子人康親王は、承和十五年(848)小町攷こまち小林茂美、桜楓社、四〇九頁参照

(4) これらに詳しく述べると、次の通りである。(以下、「小野山科宮」「又北里新王」とある。

(3)『皇胤紹運錄』には、「四品・彈正尹、法名法性・號ス

(2) 貞觀十四年(八七二)五月五日。
「無言人兼現王憲」(三) 七
「

本後紀(康光孝同母弟)親王等於清涼殿—令_レ加_二元服_一統日

天皇喚め時康(仁明天皇の第二皇子、後の光孝天皇)・人^{ひと}
ヒメノミコト
ヒメノミコト
ヒメノミコト

資料大字3
日本語24
245°F 35°F
24°F 11°C
7°C 33°C

5.464^p

(1)承和十二年(八四五)一月十六日。

仁明天皇第四皇子「入康親王」

發病而薨」(二代實錄)

立爲二皇后。親王神姿清秀。誠孝懇至。承和十一年

以ニ固辞一也。親王者。淳和太上天皇之第四子也。母嵯峨太上天皇女嵯峨上子。享和天皇納之。生三皇子。

(2)貞觀十一年八月九日

「皇后誕生皇子」（日本紀略・日本後紀）

○(1)天長八年(八二九)七月十日。

淳和天皇第四皇子「基貞親王」

卷之二十一 二十世祖上(重慶) 墓碑文
(卷之二十一 二十世祖上(重慶) 墓碑文)

（無）元長ノ笠 二月一四日

(四)

「基良親王」アキラニシマウ、「加賀元服」カガノムコトハシム。拝謁^{ハセイ}式^{シキ}、至尊^{シズン}。

(1) 天長七年(830)十一月三十日

■ 嵐嶽天皇第四皇子『基良親王』

歳にかけて、人康親王は出家の身であつたるうと推察され
つまり、小町の妖艶な盛りの頃である十九歳から三十二
であつたるうか。

薨去された時、人康親王は四十一歳、小町は三十一歳
また、人康親王が、貞觀十四年(八七二)夏五月五日に
町は十九歳であつたように思われる。

夏・五月七日に出家された時、人康親王は十九歳、小
□仁明天皇第四皇子「人康親王」が、貞觀元年(八五九)
となる。

王は小町が生まれる前にお亡くなりになつておられたこと
小町が承和八年(八四一)に生まれたとすれば、基良親
照

はない。(「小野小町」前田善子、二省堂、一〇〇頁参
(八三一)夏・六月十四日に早くも薨去されたので、問題に
□しかし、嵯峨天皇第四皇子「基良親王」は、天長八年
以上のお御三方である。

れたのだろうか。

「」その同じ年(八三一)に、人康親王は同母弟として誕生さ
年(八三一)に出生されたといつ。(「」眞ににおいて既述)

*仁明天皇の第三皇子時康親王(後の光孝天皇)は天長八

九・五月七日、一十九歳の時であつたことになる。

時康親王(後の光孝天皇)と人良山今宗貞
と偕正通殿(後の深井の頃)

なるほど、断定は出来ないにせよ、(1)嵯峨天皇の第四皇子「基良親王」、(2)淳和天皇の第四皇子「基貞親王」、(3)仁明天皇の第四皇子「人康親王」のうちから、小町の恋

る。

そしてこの時、小町は一十九歳であつたように想像され
四十一歳で薨去されたのだつた。

すなわち基貞親王は、貞觀十一年(八六九)の「秋」に
九月十一日に薨去されたといつ。(二代実録)

れて入道となられた。そして、貞觀十一年(八六九)の秋。
され、上総大守になられた。その後(いつか不明ながら危き
基貞親王は、承和十一年(八四四)に二品の位を授けら
れ、上総大守になられた。その後(いつか不明ながら危き
篤状態に陥り、その後(いつか不明ながら危き
れ、上総大守になられた。その後(いつか不明ながら危き
基貞親王は、承和十一年(八四四)に二品の位を授けら
れ、上総大守になられた。その後(いつか不明ながら危き
れて入道となられた。そして、貞觀十一年(八六九)の秋。
照

その姿は清秀であり、心は優しく誠実な方であつた。
一歳とし上りたと思われる。

(八一九)七月十日生まれたから、……小町よりも十
□さて、淳和天皇の第四皇子「基貞親王」は、天長八年
「秋」ではない。

更に、人康親王の「出家」・「薨去」共に夏・五月であつて、
小町が、人康親王に恋心をいだき続けたとは考へにくい。
る。

「」小町が、人康親王に恋心をいだき続けたとは考へにくい。
る。

の相手「四のみ」を選びとすれば、淳和天皇の第四皇子「基貞親王」であるよつに思われる。桓武天皇の孫に当る「基貞親王」(やんじとなき四のみ)に恋い焦がれて、小町は数多くの歌を詠んだのだろう。

*
月十一日の『早朝』(ひささぎ)だったのである。四のみ(淳和天皇の第四皇子「基貞親王」)がお亡くなったりになったのは、恐らく、貞觀十一年(八六九)秋九月である。

強い風が吹き荒れていた。
小町は歌った。
今朝よりは悲しき宮の秋風や
又あらじとあらじとおもへ
宮(みこ)がおかくれになつて、今朝からは宮中の
其のお部屋が、空部屋となつてしましました。秋風が嵐の
よう吹いていますが、これからもはしみお逢いするじよ
あらじ(あるまい)と思ふと、悲しみで一杯でいります。
」小野小町論「黒岩浪香、朝報社、六七八八頁参照(ニ)

5.4.66

トには考えられない。

しかし、この歌に関しては、一人の心が離れてしまった
男女の心の交わるじよをいふ。

尚、「秋風」といえば、通常は、秋を「厭き」にかけて、

「小野小町論」黒岩浪香、朝報社、六七八八頁参照(ニ)

といつておもしろく思はれるにや、や、
この折のことを、『當道要集』は、
廃去される
1897
貞觀元年夏五月七日に出家入道された皇子が、四十一歳で
日に、仁明天皇の第四皇子人康親王「山科宮」と號され、
ところで、この二年後の貞觀十四年(八七二)夏五月五
*
思われる。

そこで、「秋風」を、「山風」や「吹風」に変えたものと
いふ、といつておもふ。
そうした解釈をする者にとっては、「秋風」はおか

善子、三省堂、1001頁参照

であると考える人は、古来、多い。(小野小町「前田
天皇の第四皇子」基良親王(夏・六月十四日薨去)、あるいは
もともと、小町の恋の相手である「四のみ」は、嵯峨が

*

5.467^p

しかし、そんな小町の心も知らぬげに、時は足早に流れ
るにあります。

親王】にも先立たれてしまつた小町の悲しみは、.....
小野貞樹が非業の死を遂げたばかりか、四のみ『基貞

*

が作られたように推察される。

またあふ坂あらしと思へば

今朝よりはかなしの宮の山風や

歌

版の流布本系『小町集』(歌仙家集本)に記載されている
こうしたこと等があるて、後世、正保二年(一六四六)

つまり、小町は三年前の歌とよく似た歌を作つて奉つた
八頁参照)

掛けられている。『小野小町追跡』片桐洋一、笠間書院、六
尚、しの宮に「四の宮」が、「あふ坂」に「蓬坂」が

と解される。

此歌は小町の家集に有りうけたまは承り候ひき。
と述べていて。『小野小町攻』小林茂美、桜楓社、四一頁

125

花の色は
移りにけり
ないつらに
てゆ。

ある。中ほどに、
に未だ死にも得ず、住むしき月日を送つていて、といふので
といふのが初めの句である。自分は、物思ひのみ繁き此世
すげ.....

ゆ草の露の命も未だ消えで田んじとのみまろこ
久かたの空にたなびくうき雲のうける我身はつ
などいひてうせたる人のあはれなること

「葦田鶴の雲井の中に交りなれば」

しのん、長歌を作つた。

そしてまた小町は、この世を去つてしまつた恋しい人を

「小野小町追跡」片桐洋一、笠間書院、一八一八七頁
なく、同時に第四・五句にも掛かつていてのだらう。
*「いたづらには、第一・一句に掛かつていてはばかりで

「小町集」。小倉百人一首)

してしまつたのだわ。『古今集』巻第一一一三。群書類從本
物思ひにふけり眺めていてるあいだに、花は長雨にうたれ
て散つていて。花の色も私の美しきも、もはや消え失せ

わが身よにふるながめせしまに

だが、小町は自分へ言い寄る人々を一々に受け流しながら、

おそれへ、その風情が、時の風流な男達の心を魅了した
（坂名序参照）

小町には、心をときめかさずにおかない気き品ひんと
ともに、そこにはかどない愁うきを帶おびて弱よ々わしく、たとえ
てみれば、高貴こうきな女性じょせいの病やんだ美うつくしさがあつた。〔古今集こきしゆ〕

しかし、世の中は不思議なのが多いのです。

在原業平

學館、一六八頁參照)

この日まで嘆くことであろうか

生きている人は失せ、失せた人の数はどうどんぶえるのが世の中なのだ。それなのに、あ、命のはかなひを、い

5,468^P

あるはなくさきは数添ふよ世の中にあれいの日まで嘆かん

小野の町

① あかねの題記と「花火」

『新古今和歌集』卷八一八五〇に、~~「見し人~~」といつ記されていて、
題知らず(但し、群書類従本『小町集』には、「見し人

የኢትዮጵያውያንድ ስራውን ስራውን ስራውን ስራውን ስራውን ስራውን ስራውን ስራውን

黑岩涙香、朝報社、三六、七七頁參照)

小町は、恋い人の後を追って死んで雲の上に登れば、其のじである。この人が、小町は、恋い人の後を追って死んで雲の上に登れば、其のじである。この人が、

いじにい「恋しき雲の上の人」とは、即ち小町の恋人

いふか恋しき雲の上の人に逢ひ見て此世には思ふじと無き身とは爲るべ

悉も別れも憂き事も辛きも知れる我身こそ心にしみて袖の浦の千る時も無く哀れなる……

のに、あなたはまだつらうと思ひ知らなければ、毎夜欠か
ないで、足を棒にしてしげしげと訪れる。私は人を見ると
漁をする人が、海松布の生えない浦だといつとを知ら
離れて海人の足たゆく来る

みるめなきわが身をうらと知らねばや
といふが小町は、じう歌つて返答した。
やるせない思想で泣き濡れたのである。平在原業平
日も小町に逢つてとひえでさすすじと家へ引き返し、
美男で多感な性格であつたといわれる在原業平は、この
平が作ったものといふ。

この歌は、『古今集』卷十三十一によると、在原業平
と濡れるものだなあ
空しく引き返し、わが家で泣き明かす夜の袖の方が、もつ
いた。けれども、思う人に逢つてとさえてきないで
露のおかれた笛の葉を押しほて帰つた朝の袖も濡れて
送つた。

いわない女で、情ありげにも見える人のもとに、次の歌を
男に、逢おうともいわず、……かといつて逢つまいとも

逢はぬる夜ひがみりける
秋の野に咲わけし朝の袖よりも

さすがなりけるかもと、うやりけり。
むかし、をじい有りけり。あはじめじめんけりける女、
『伊勢物語』第一五段には、いづ記されている。
そつした男達の一人であつた。

平城天皇の孫にあたる在原業平(八一五)も、
しかし、皆が皆、涙を呑むばかりだつた。
うつとばかりに、競つて小町の歡心を誇った。
風流人を自認する男達は、我こそはその心を射とめてや
うか

「絶世の美女小野小町の心を、誰か奪つてとができるだら
追跡」片桐洋一、笠間書院、一四三頁参照

「小野小町論」黒岩涙香、朝報社、一九二〇頁。小野小町
よほど度び色々の人から言ひ寄せたのである。
もすれば」と云つたのである。

また、靡け靡けとばかに言ひ寄る男が多いので、」と
男を風にたどえ、我が身を波にたどえた歌である。
(群書類從本「小町集」)

5478
上
127
小町は、じう歌つた。
ともすれば伊なる風に細々波の
靡くてふじと我れ靡けとや
少しも隙間を与えなかつたようである。

- ・カラー
- ・左肩の上半分に、
大きくはみ出でて
掲載下さい。



・ここが欠けない→
ようやく注意17
下さい。

第542図 在原業平 (後鳥羽院 三十六歌仙繪)

→原本の右肩に
こう記されています。

『日本繪卷物全集』三十六歌仙繪 角川書店 昭和42年12月30日発行 45頁参照 128P

「美男と美女とを配^はしたい」
そうした人情(願望)から、いわば自然に生じた素朴な
思いなのである。(「日本の歴史」(3)平安貴族、読売新聞社、
八在原業平は、陽成天皇の元慶四年(八八〇)に卒した
といふことが特筆される。
在原業平は、.....後述するよつな『小町が最も輝いた
時』を知るといふへ、没したよつに思われる。
深草少将(さちのすけ)が小町のもとに九十九夜通つたといふ悲恋
の伝説は、あまりに有名である。
「百夜通つて下^{くだ}り」
と小野小町のところへ、夜^よと夜^よと、四位の深草少
将(さちのすけ)は通ひついた。そして、牛車の櫻(牛車の牛をはすし
て通ひついた)を小野小町のところへ、夜^よと夜^よと、四位の深草少

なお、在原業平と小野小町とは、『伊勢物語』から想像して、後世夫婦であつたかのようにも云われていが、定まらぬ。小野小町「前田善子、二省堂、一かではないよつてある。」(小野小町)前田善子、二省堂、一九四〇一九八頁。」日本史辞典「東京創元社」在原業平く参照(

在原業平は、平城天皇の孫、阿保親王の五男として、天長二年（八二五）に生まれ、翌年の天長三年（八二六）に在原姓を賜つて臣籍に降つてゐる。その概略の経歴は、次のとおりである。

嘉祥二年（八四九）正月七日
無位在原朝臣業平從五位下（統日本後紀）一十五歳
貞觀四年（八六二）三月七日
從五位上（三代実録）三十八歳
元慶四年（八八〇）五月廿八日
卒（三代実録）五十六歳

すなわち、淳和天皇の第四皇子「基貞親王」が薨去された貞觀十一年（八六九）に、在原業平は四十五歳だった。そしてこの時、小町は二十九歳であつたろうと思われる。もししかしたら先の歌は、貞觀十一年以後あまり年を経ない頃に作られた——在原業平の片思ひの「恋歌」、および小町の返歌だったのかも知れない。

さす絶えることなく、足がたるくなるほど通じておいでに
なるのでしょつか〔竹取物語・伊勢物語・大和物語〕日本
古典文学大系、岩波書店、一一八九頁。〔古今和歌集〕日本
古典文学全集、小学館、一五六頁。〔日本史辞典〕東京創元社

なこやの関も(せき)私はすゑぬを

1) 会ってくれるか、と聞きて来た男に対する返答。

群書類從本 小町集

アリスのアマゾン会議をかみ

承和二年（八三五）に設置された小た関だか

小町好色説話の生まかる所以である。この表面の意味は、まことに開放的

と
い
う
。

小野小町追跡

片桐洋一

卷之三

書院 一九三三年十一月五日改訂新版發行
一〇三頁參照

13.5.21 *
口説けようと
思うのなら下
試してみたらどう

と
い
う
だ
返
答
だ
た
の
で
あ
ろ
う。

返答